

通信



2017 海フェスタinふだい(普代村大田名部漁港)のサケのつかみどり

○連続講座「岩手の再生」・岩手県社会保障学校第1回講座

「子どもへの影響から貧困を考える」

全国公的扶助研究会副会長 沿田 崇子

活動報告「国保・就学援助に関する自治体要請から学ぶもの」

岩手県生健会事務局長 川口 義治

○復興県民会議第7回総会

事務局長 小松 勝治

○シリーズ 「地名の話-3」

高橋 宏壽

○シリーズ 「季節の植物」

清代 正晴

NPO 法人
岩手地域総合研究所

岩手県盛岡市中央通二丁目8番21号 Mホール

Tei・Fax:019-624-6715

メール:i-chiikisouken@salsa.ocn.ne.jp

目 次

表紙写真・記事	「2017海フェスタinふだい」 普代村大田名部漁港 事務局	1 P ~ 2 P
連続講座「岩手の再生」・岩手県社会保障学校第1回講座	「子どもへの影響から貧困を考える」 全国公的扶助研究会副会長 沼田 崇子	3 P ~ 6 P
活動報告「国保・就学援助に関する自治体要請から学ぶもの」	活動報告「国保・就学援助に関する自治体要請から学ぶもの」 岩手県生健会事務局長 川口 義治	
復興県民会議第7回会議	岩手地域総合研究所事務局長 小松 勝治	6 P ~ 7 P
シリーズ	「地名の話-3」 高橋 宏壽	7 P ~ 8 P

表紙写真



「2017海フェスタinふだい」のサケのつかみどり

10月1日思い立って普代村大田名部漁港で開催する海フェスタに行ってきました。午前11時頃到着した時には、会場の広い駐車場はもうすでに満杯状態で、会場は多くの露店がひしめき、賑わいを見せていました。写真は子どもたちが無邪気にサケのつかみ取りに興じている姿が印象的でしたので撮影したものです。漁港には数きれないほどの大漁旗をなびかせた船がひしめいていました。この活気からは、平成の大合併にも単独を買った県内で最も人口の少ない村だとは感じることはできませんでした。三陸沿岸は、南部藩の過酷な取り立てに苦しんだ人々が、三閉伊一揆を起した地域であり、三陸大津波に何度も見舞われ、多くの犠牲者を出してきた地域です。それでも東日本大震災では、県内で唯一ひとりの犠牲者も出さなかった村となりました。これは、明治昭和の津波で多くの犠牲者を出した教訓を忘れず、15.5mの高さを誇る大田名部防潮堤と普代水門の建設を成し遂げた「二度あったことは三度あつてはならない」という言葉と強い心を貫いた元普代村長和村幸得氏の偉業があります。震災後も住宅地は、被害を受けなかったために従来通りの祭典やスボレクなど行われています。この海フェスタも震災翌年には再開されているようです。

連続講座「岩手の再生」・岩手県社会保障学校第1回講座

「子どもへの影響から貧困を考える」
 「人として生きる“当たり前前の生活”への理解のために」

全国公的扶助研究会副会長 沼田崇子



略歴
 1977年岩手県生活保護センターを一般職として勤務。その後、岩手県男女共働きの支援センターに勤務。2017年からは盛岡市から軽米町に移り、岩手県立大学で教員として勤務。

9月23日(土)午後1時30分から岩手県民会館4階第1会議室に於いて、連続講座「岩手の再生」・岩手県社会保障学校第1回講座が開催されました。48人が参加しました。

今年度は、岩手地域総合研究所と岩手県社会保障推進協議会との共催で、本日は5回シリーズの1回目となります。

冒頭、佐藤副理事長あいさつの後、講師の沼田崇子(全国公的扶助研究会副会長)さんの講演と川口義治さんの活動報告がありました。

以下、講演の模様を事務局でまとめたものを報告します。

ご紹介いただきました沼田崇子です。

私は、主には生活保護を中心とする生活問題ですとか、貧困問題に長くかかわってきております。ですから、子どもの貧困が私の今日のお話の主眼ではなくて、貧困問題を理解するひとつの入口というところで、今盛んと取り上げられている子どもを材料にしてお話します。

最初に、私が関わっている全国公的扶助研究会というのは、全国の生活保護のケースワーカーですとか、福祉事務所の行政機関の職員、それから民間の医療機関ですとか、福祉施設や当事者団体ですとか、その当事者を支援する団体など、貧困問題と向き合っている公的扶助実践というのがどうなのかということでお話をしている自主的な任意団体の研究会です。

全国公的扶助研究会では毎年全国セミナーをやっております。今年は盛岡で11月10日〜12日の3日間、記念すべき第50回セミナーを開催します。さっそく本題に入ります。

今日の題が子どもへの影響ということですが、生活の制約がどうしても出るとか、子どもで言えば教育機会の少なさ、そのことによる学力の低下や学歴のなさ、進学・就職の不利が生じる、すると生涯賃金の格差が生じる。一方でいろいろ思うようにならないストレス、ストレスだけではないとは思いますが、その中で不適切な養育が高じた児童虐待、家庭内

の不和、配偶者間の暴力、離婚、そんなことが貧困ということから生じてくるキーワードとして挙げてみました。

子どもたちはそういう中で自尊心が不足したり、欠如したりする子どもたちもいますし、自尊心だけではなくて、居場所がない、安心感がないというようなことになります。

子どもが成長するにあたっては安心感という、自分の中に安心基地を持たないと、なかなかいろんな挑戦ができないとか、成長できないとか言われていますが、そんなことに影響が出てくるのかなと、そして貧困の世代間連鎖、実は私は1970年代に就職したのですが、その頃にはすでに貧困の世代間継承だったかな、連鎖というよりは継承という言葉を使われていた記憶があるのですが、その頃から子どもたちへの影響というか、次の世代もその次の世代も、2世代、3世代にわたって貧困が続いていくのだということが取り沙汰されていきました。それから40年以上たったのですが、いまだに解消されずに、むしろ拡大し

ているという形で起きてきているということ
をまたひとつ考えていかなきゃならないかな
と思っっています。そして最終的には、日本経済
と社会保障の将来にマイナス影響があると言
っている方々もいらつしやいます。

私は現場にいる人間ですので、影響の具体
例をご紹介します。

ひとつは身体面、健康面での影響というの
を常に目の当たりにすることがあります。お
金がないと、まずは腹いっぱいになるために
炭水化物中心の食事になる、これはたぶん子
どもたちだけではなく、大人も含めてなので
すが、中には3食取ることが困難ということ
で、今学校給食が結構普及しておりますが、中
には学校給食だけが食事の子というのも岩手
県内におります。



教育委員会のスクールソーシャルワーカー
たちのネットワーク会議に参加すると、どこ
のところでもそういう家庭があるというのは、
岩手県内でも言われて
います。そういう食事
のバランスが悪ければ
肥満の子、逆にすごく
痩せの子、それから疲
れやすいとか、飽きや
すいとか、そういうふ
うな子どもたちが学校

生活でも見られます。

あと医療の面でも多少の病気では受診でき
ない、風邪だから大丈夫とか、腹痛いのは何日
かご飯食べないで寝てれば治るからと言うの
です。今どきそんなふう言う親が実際にい
るのです。結局悪化して、肺炎がひどくなつて
入院と、かえって医療費がかかるのですが、そ
ういう状態だったり、一番わかりやすいのは
虫歯、歯科検診で治療してくださいと言われて
ても、治療しないという場合に、かかわって
くとやはり経済的困窮があつたりするとい
ことはあります。トータルで成長への大きな
影響があります。

それから集団生活面での影響ですが、なか
なか困窮状態にある方というのは、人とのつ
ながりもなく、取れてなかつたりするもので
すから、こういうふうなことですと仲間に加
われないとか、いつも同じ物着ているよねと
か、それが高じていじめになるとか、その中で
どんどん孤立していく、それから子どもの時
期に少しは経験しておいたほうがいいという
体験が不足することによつての、年齢が進ん
でいったときのうまくみんなとやれないこと
というのが出てくるというのが見られます。

それから家庭生活面の影響ですが、親が仕
事に追われてかまえない、親も自分のこと
でいいだと思つたのですが、そういう子ども

たちの影響ですが、子どもの貧困というのは
子どもだけが貧困になるのではなくて、子ど
もが属している世帯が貧困なのです。要は大
人の貧困なのです。

子どもの未来応援国民運動というのをみな
さん聞いたことありますか。国でちゃんと挙
げているのです。でも言っている中身は、民間
共同で寄付を集めて、子どもを支援する団体
や意欲・能力のある子どもにも援助すると、国が
責任持たないのかなと私はそのとき思いまし
た。

今の若い人たちと話をしているときに、今
正規雇用になりたいと思つて頑張っているけ
ど、なかなか実現されない人たちの言葉を聞
いていると、貧困問題自身も少子化に影響し
ているのではないかなとだんだん思うようにな
つてきています。子どもの貧困の社会的損
失推計というのでいくと、このまま子どもの
貧困を放置すると42・9兆円の社会的損失
にということがあつたので、すごいなと思つ
て書きました。

最後に書いていないことをお話しします。実
は私はずっと生活問題と向き合つてきてつく
づく思うことがあります。すでに途中で触れ
たところと重複しますが、今の日本という
のは、いつでも誰でも貧困に陥ることができ
ます。社会保障制度というのは、間違っていた

らあとで佐藤先生に訂正してもらえばいいのですが、私がつつと実践してきた中で思うのは、高度経済成長期の雇用形態とか、生活形態をベースにつくられているのではないかということ。ところが現在は雇用形態が変わったことはもうすでに触れましたし、働き手が2人、3人という、借金がなかったらなんと暮らせるぐらいの現実を私は目の当たりにしています。なぜ脆いか、まずは年金だけでは暮らせない状態です。それから年金の受給年齢が引き上げになっています。国保税、国民年金保険料、介護保険料、その他に医療費とか介護サービス使っていると利用料だとかの負担になると出せないというような状態です。もっと怖いのはお金が足りない、簡単に利用できる大きな口を開けた借金の世界が待っているのです。だからこそ生活保護は最後のセーフティーネットで、国はカバーできていれば、何も生活保護制度利用していただかなくてもいいわけですが、そこら辺がもういので最後の受け皿に集中していくというような状態になっているということをご理解いただければと思います。

第1回講座活動報告

「国保・就学援助に関する自治体要請から学ぶもの」
岩手県生健会事務局長 川口義治



震災後、保険協会が取り組んできた被災地の医療アンケート結果を見ると、ここの中にも差別が行われています。どういうことかという、医療費や介護の利用料が12月31日まで無料なのですが、国の施策によって、国民健康保険の後期高齢の加入者は、協会けんぽの方は一般と同じになって、有料になりました。私がずっと通っている山田町の高齢者の人からは、同じように家は流され、土地も流されてしまっているのに、国保加入の方だけが無料で、協会けんぽの扶養になっていて私は有料でおかしいじゃないですかと、平等でやってほしいと。今、沼田さんの話をずっと聞きながら感じることは、これは大学教育まで含めて、医療や介護や住宅、幼児教育、保育の給付、無償にしていけば解決します。

ところがどんだんこの間の社会保障運動というのは、私も医療を中心にして36年かかわってきましたが、全部医療改

悪でしょ。結果的に自己負担が増え、保険料が増えていく、そういう仕組みの中で今があるのです。

生活保障、働きの問題、これも今から私たちの社会保障運動の立脚点にしていこうと、従って私の考えというのは、収入のあるなしに関係なく無償にいきますよという、そうならば安心感が出ます。だとすると医療は医療だけとか、介護は介護だけで生活保障は生活保護だけの運動でない方針を全体的に我々自身が考えていかなきゃいけない時期に入っているのではないかということなのです。それは国民的な運動にしていけない限りは、言葉だけではどうしようもないというふうに私は思っています。やはりそれは自分たちが今住んでいるところから運動を起こしていかなきゃいけないなというふうに思いました。

それで私が今ささやかな実践というところでやっているのが、ひとつは私の住んでいる滝沢市の市民とともに行政や議会に働きかける運動を起こして、子どもの医療費の助成拡充の運動で、「国保・医療・介護を良くする滝沢の会」を2016年1月末に立ち上げました。中卒まで医療費助成を求める署名運動を展開しまして、7月14日、3,856筆の署名を持参して市長要請を行いました。小学校卒業までやってなかったのは県内では滝沢市だ

けだったので、所得制限はありながらも小学校卒業までの通院医療助成が今年度から実施ということになりました。それから就学援助、入学支度金の支給日の改善を求める要請ということで、これも今年挙げました。

それからもうひとつ、恒常的低所得者を対象に国保の保険料だとか、医療費の減免制度創設に関する要請を行っています。

慶応義塾大学の井手さんという人が、おもしろい調査をしています。日本の分断社会が象徴的です。どれぐらいあなたは自由を感じますかということ、自由だと感じる人は58ヶ国中52番目です。自分の人生は自分で決められますかというのが60ヶ国中59番目、そして政府を信頼していませんかと、56ヶ国中42番目です。だから結果、社会保障をこんなに無茶苦茶にされていくことによって、そういうふうな政策をどんどんやっただけで、結果自分のことは自分で守らなきゃいけないよというのが定着してしまっている、従って人間も政府も信じられないという社会に今なってしまうと、従ってこの社会保障を充実させていく、人間の生活ペースをきちんと整えていくというのは、人間復興の課題でもあるよと、それは自分の今いる場所から始めましょうねということなのです。

復興県民会議第7回総会

岩手地域総合研究所事務局長 小松勝治

9月17日(日)東日本大震災津波救援・復興岩手県民会議第7回総会が、岩泉町民会館で100名を超える参加者で開催されました。

大震災での物故者へ黙とうをささげた後、東幹人代表世話人の挨拶で総会が開会されました。達増岩手県知事、小沢一郎自由党岩手県連代表からのメッセージが紹介された後、来賓として畑浩治氏(民進党・当時)が挨拶をしました。震災から6年半、東京レベルでは風化が進んでいる。インフラは目に見えてきたが、まだ生業、個人住宅の再建が進んでいない。台風10号の復旧については、地域的な大災害であっても国の十分な対応がなされていない。安倍政権へ市民の共闘で戦っていく。と表明しました。



次に日本共産党県議の斉藤信氏が連帯の挨拶をしました。今まだ応急仮設に7,569人、当初の23.8%の方々が住んでいる。仮設に

取り残された人たちの命をどう守るのか、復興住宅のコミュニティを再建させ孤独死を出さないことが大切。医療と介護の減免措置は命の問題。必ず継続さ

せなければならぬ。

岩泉の住宅被害、全壊、大規模半壊への支援は大事で、復旧は100万円や200万円ではできない。500万円の住宅支援制度実現を目指そう。と訴えました。

総会の第一部として、岩泉町総務課長の鷹家(おういえ)義政氏が岩泉町における台風10号の被災および復旧状況を説明しました。

被災当初は道路網の分断で状況把握もままならなかったが、現在は急ピッチで復旧が進められている。人的被害は死者22名、行方不明1名となっており、大きな犠牲者を生んだ。住宅被害は984棟にのぼり、東日本大震災の4.7倍に当たる数となっている。町の被災総額は328億円で大震災の7.4倍にも上る大災害であった。復興は平成29年から33年度までの5年間と設定しているが、復興推進のための財源・マンパワーの確保、コミュニティの醸成などの課題があると結びました。

その後の総会では岩泉町議の林崎氏が9月議会の様子を報告。復旧工事の入札が多く、業者不足のため町外からの参入が増えている。

医療、介護の減免について町長に聞いたところ「来年も継続したい」との回答を得た。などの報告がありました。

山田町議の木村氏も震災後、宅地造成も家

屋移転も進んでいるが、6カ月以上も造成が遅れているところもあり、4畳半二間に4人で生活している所からは、もう一棟貸してほしいなどの要望が出ている。何とか実現できるように頑張る。また、このところの不漁で海産物の工場は停止状況、冷凍庫も空のまま、従業員の首切りも進んでいる。多方面からの支援が必要。さらに、医療・介護の無償化は切実であり、ぜひ継続してほしい。と実情を訴えま

した。「「楯ヶ崎の防潮堤を考える会」の共同代表の藤田氏は、防潮堤の建設が続いているが漁業などの生業、景観などから見てこれは時代遅れの代物、宮城県などでは計画を低く見直す議論がされている。運動はこれからだ。」と発言しました。その後、県民会議の金野事務局長から1年間の活動報告と活動方針、決算報告と予算が提案され了承されました。また、役員について代表世話人、常任世話人および会計幹事の提案がされ了承されました。

盛岡からのバスの中から一年たった台風10号の被災状況を見ていききましたが、河床が洗掘されて立木がなぎ倒されている状況や、橋梁の桁が壊れたまま放置されている様子などをみると、大変な大洪水だったと感じることが出来ました。一日も早い住民本位の復興が望まれます。

地名の話—3

高橋 宏 壽

さびない【佐比内】

県内に佐比内が三ヶ所ある。

八幡平市(旧安代町)佐比内は米代川左岸で、白沢や蟹沢が米代川へ入っている。ここをアイヌ語地名の魅力を伝える研究者の山田秀三氏が訪れた。



サヒナイは夏になつても、沢水が涸れてしまう迄のことはない。涸れ沢と考えるのは少しむずかしいようだ。八〇歳の

お婆さんに逢つたので聞いたら「ここはサッピナイだ」というではないか。北海道アイヌと同じ発音のサッピナイが東北にもあったのである純粋なアイヌ語サッピナイが残っていたのです。

紫波町佐比内の佐比内川について、山田秀三『アイヌ語地名の研究3』はつぎのように述べている。

その地区の鉾山を担当していた役所の人に

聞いた話では、夏になると付近の川は涸川になる。小川で川底は玉石だとのことである。この佐比内もサツ・ピ・ナイ・s a t・p i n a y (乾く・小石の・川)らしい

と。また一方、金田一京助『北奥地名考』は、佐比内はアイヌ語のサツピ・ナイ・s a p n a y 「山から流れ出る川」ととらえている。

この流域には、かつて朴木(ホノキ)金山・大切(オキ)金山・洞ヶ沢金山など、天下に知られた大型の金山があった。

遠野市上郷佐比内について、山田秀三『アイヌ語地名の研究3』は

遠野の佐比内に行った。佐比内は遠野盆地の一番奥で、猿ヶ石川の支脈猫川の中流以上の土地である。金石鉾山佐比内坑の下がその水源になっている。古くから居住する老人をたずねて話を聞いた(昔は平常流れていた。ただ夏になると川底が砂礫層なので、水が途中で吸い込まれて涸川になるのが例だった)と述べている。その猫川は砂金採集の「猫流し」からついた名前だ、砂金の産地であった。ましてや金石鉾山は日本唯一の大鉄鉾山であった。つまり紫波町・遠野市の佐比内には全国有数の金山や鉄山があった。もし佐比内が鉄や金と関係があるとするとどうなるか。

『岩波古語辞典』によると、「さび(鉾) 鋭

利な剣。鋤スコとある。さらに岩波古典文学大系の「播磨風土記」には「佐比岡サヒノカ 佐比と名づくる所以エヒは、出雲の国人等ウケヒト、佐比(鋤)を作りて、此の岡に祭る(鋤。農具で土地の開墾占居セキ・神として祭るの意)……とあった。佐比内のサヒも「砂鉄精錬で剣・鋤を作る」を意味し、ナ(土地)イ(地盤)は「土地」であろうか。

筆者略歴 昭和三五年岩手大学文学部卒 安代町・盛岡市・花巻市の小学校に勤務、平成九年退職する。

～事務局だより～

◎10月7日NPO法人岩手地域総合研究所主催による第3回岩手地域課題研究交流集会「わたし☆まちフォーラムinいわて2017」が岩手県産業会館7階で、午前10時から午後3時30分まで開催され、93人が参加しました。

最初の全体集会では、基調報告「基礎データから見たいわての現状と課題」と題して、①概観岩手の経済―産業・雇用・まち―井上博夫(岩手大学名誉教授・同研究所理事長)、②岩手の暮らしの特徴と教育、保健・福祉の課題佐藤嘉夫(岩手県立大学名誉教授・同研究所副理事長)の2つの報告がありました。分科会は、第1分科会(自治とまちづくり)、

第2分科会(仕事・雇用・産業)、第3分科会(くらし・保健・福祉)、特別分科会(子ども(貧困)の4つの分科会で熱心な討論が行われました。最後までめの集会では、各分科会のコーディネーターから討論の概要が説明されました。詳細については、次号「通信」でお知らせします。

◎連続講座「岩手の再生」・岩手県社会保障学校 第2回「高齢者の地域生活の課題」
日時 11月25日(土)午後1時30分～
会場 岩手県公会堂 26号室
講師 菅野道生(岩手県立大学講師)

◎書籍紹介



二〇一六年一月に櫛クリエイツかもがわから柴田但馬著『地域・自治体の復興行財政・経済社会の課題―東日本大震災・岩手の軌跡から』(全二六〇頁、二八〇〇円+税)が出版されました。



写真提供
清代正晴 (盛岡市下太田下川原在住)

キクタニギク(菊谷菊)ノアワコガネギク(泡黄金菊) キク科 キク属
東北南部から西の太平洋側、四国、九州に分布、岩手県では奥州市以南に分布。
野山の急斜面の草むら、やや乾いた土手や林の縁などに自生する多年草。10月～11月に咲き花径は2.5cmくらいで多数枝分かれしてたくさん花をつける。葉は薄くて深く5列している。明快な黄色で目立つ草丈1.5mまで。京都の東山の菊溪(きくたに)で発見されたキク(菊)なので、「キクタニギク(菊溪菊)」と名付けられた。